

恐怖を味わうとき人間のこころは活性化する？

へびのイメージをみるとき判断力は亢進する

概要

成人108名とこども25名にそれぞれ、さまざまなへびと花の写真を見せ、その際の写真の色の回答をもとめたところ、成人もこどももへびの色を答えるときのほうが、花の色を答えるより迅速に回答することがわかった。これは恐怖感情を抱くことは、認知情報処理をさまたげるといふ、ここ一世紀のあいだ信じられてきた心理学の定説をくつがえし、ダーウィンの主張を支持する知見である。

1. 背景

「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される」といわれるように、理と情は対立するものと考えられている。とくに恐怖のような negative な感情は人間の判断を鈍らせるというのが心理学のセントラルドグマである。これに反対する考えをとなえたのはダーウィンであるが（彼は「恐怖をいだくことは、人間の強みになりうる」と1871年に書いた）、この考えはその後、まったく無視されてきた。私たちは、このダーウィンの考えを検証するべく本研究を行った。

2. 研究手法・成果

自動車にひかれそうになったような時、その瞬間のイメージがじつに詳細に脳裏にやきつくというような経験をわれわれはしばしばする。そこでこういう場面をシミュレートして、成人108名とこども25名にそれぞれ、さまざまなへびと花の写真を見せ、その際の写真の色の回答をもとめ、回答に要する時間を計測した。すると成人もこどももへびの色を答えるときのほうが、花の色を答えるより迅速に回答することがわかった。これは恐怖感情を抱くこと（どきっとするような）は、認知情報処理をさまたげるといふ、ここ一世紀のあいだ信じられてきた心理学の定説をくつがえし、ダーウィンの主張を支持する知見である。

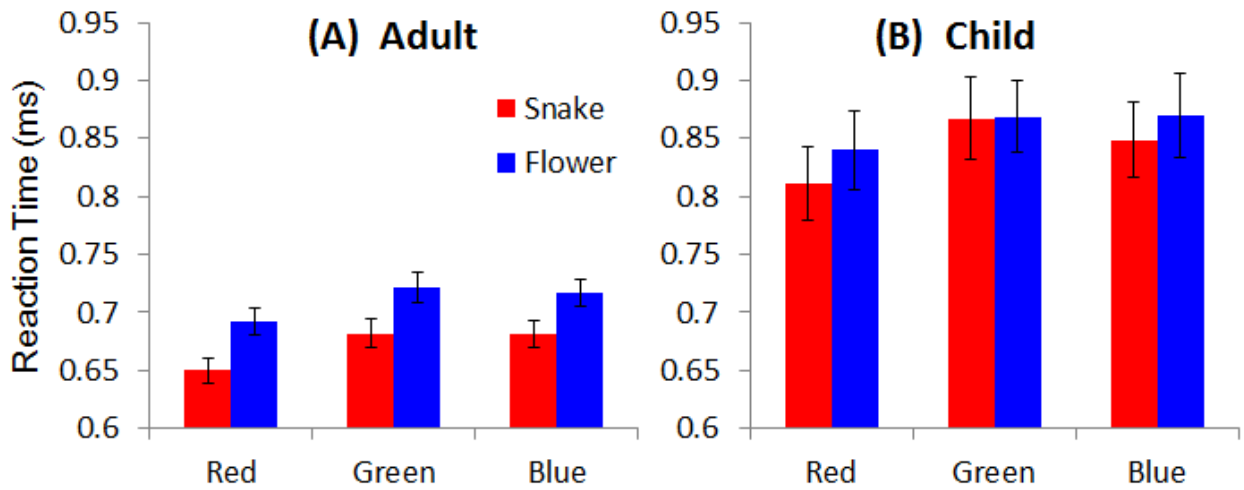
なおこの成果は、ダーウィンが活躍した事でも知られる英国王立協会がその350年を記念した刊行した「Royal Society Open Science」に掲載されることになりました。



(A)



(B)



3. 波及効果

恐怖は理性的判断をおこなうにあたって良くないものであるという従来の考えを根本的に覆す知見を提供した。しかも極めて簡便にかつ、再現性の高い技法を開発した。

4. 今後の予定

恐怖がこころの働きを活性化しない人々がいるのではないか。具体的に一般の社会生活をいとむことが困難な人々の心理の解明をおこなう。